



黄金の林檎

The Golden Apples

ユードラ・ウェルティ

杉山直人訳



晶文社

著者について

ユードラ・ウエルティ

一九〇九年、アメリカ南部ミシシッピ州ジャクソン生まれ。州立女子大学をへて、ウイスコンシン大学、コロンビア大学に学ぶ。三一年、帰郷。広告、新聞等の仕事に携わり、三年、処女作発表。以来、『デルタの結婚式』『マッケルツァ家の娘』などの小説に南部に暮らす人々の姿を独特の緻密な筆致で描きつづけている。邦訳作品に『大泥棒と結婚すれば』（晶文社）、『大いなる大地』（角川書店）など。

訳者について

杉山直人（すぎやま・なおと）

一九五〇年、鳥取生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。現在、関西学院大学経済学部助教授。二〇世紀アメリカ南部小説専攻。

おうえんりんご
黄金の林檎

一九九〇年六月一八日発行

著者 ユードラ・ウエルティ

訳者 杉山直人

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五局四五〇一（代表）・四五〇

振替東京六一六二七九九

あづま堂印刷・牧製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製し、
は、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害
となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません。



黄金の林檎

The Golden Apples

ユードラ・ウェルティ

杉山直人訳



晶文社



(本体2816円)

95-7

黄金の林檎

The Golden Apples

ユードラ・ウェルティ

杉山直人訳



晶文社

Eudora Welty :
THE GOLDEN APPLES
First published in 1949
by Harcourt, Brace & Company, New York.
Japanese Copyright © 1990
by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

ローザ・ファラー・ウエルズとフランク・ホルマン・ライエルに――

〈目次〉

登場人物 8

1 黄金の雨 11

2 六月のりサイタル 37

3 ウサギさん 157

4 ムーン・レイク 179

5 世間の誰も知っている 251

6 スペインからの音楽 291

7 放浪者たち 359

訳者あとがき 432

登場人物——ミシシッピ州モルガナの主要家族

キングマクレイン

マクレイン夫人（旧姓スノーデイ・ハドソン）

双子の兄弟ランとユージーン

コーマス・スターク

スターク夫人（旧姓リッジー・モルガン）

一人娘のジニー・ラヴ

ウイルバー・モリソン

モリソン夫人

娘のキャシーと息子のロック

カーマイケル氏

カーマイケル夫人（ミス・ネル）

一人娘のニーナ

フレリックス・スパイツ

スパイツ夫人（ミス・ビリー・テキサス）

息子のウッドロー、娘のミッシーとリトル・シスター

ムーデイのおやじ

ムーデイ夫人（ミス・ジェファートソン）

娘のパーネル

パーデイタ・メイオー（未婚）

ハティ・メイオー（未婚）

フェイト・レイニー

フェイト・レイニー夫人（ミス・ケイティ）

息子のヴィクターと娘のヴァージ

さらにルーミス一家、カーライル一家、ホリフィールド一家、ボールズ一家、サイサム家とソージャーナ家の人々。また黒人のプレッズ、ルーエラ、テリー・モルガン——エルバータ、トゥージ、そしてエクサム・マクレイン——ブラックストーンとジューバ。

*

モルガナの町とミシシッピ州マクレイン郡は架空であり、サンフランシスコの登場人物も含め、すべての住民や彼らの境遇は著者の想像力の産物で、実際の人々や状況を描き出そうとしたものではない。

ブックデザイン 平野甲賀

1 黄金の雨

1 黄金の雨

あなたが見かけたのはスノーデイ・マクレインよ。

あの人つたら、うちへはバターを取りにくるくせに、道ひとつをへだてているだけなのに、こちらから持っていてあげようとすると、いい、って言うの。あの人亭主、ある日、家から出ていって、ビッグ・ブラック河の土手に帽子が残ってた。それだけでもじゅうぶん大騒動よね。

流行らせてやるうって気がキングにあれば、このやり方、モルガナの町でちよつとばかり流行ってたかもしれない。彼のやったことにはいつも真似屋さんがでてくるみたいだもの。とにかく、キング・マクレインはビッグ・ブラック河の土手に真新しい帽子を残してた。キングは西に向

かつたんだという人もいる。

スノーデイは嘆いたわ、だけどそれがまるで死んだ人を嘆くような調子なの。まわりの人はキングが彼女にそんな仕打ちをしたなんて、誰も思いたくなかった。でも、スノーデイみたいにならずにと甘やかされてきた人をどれだけあやせるっていうの？ やれやれ、いつもこうよ。でも、彼女にも私にも二度と会うことのない行きずりの人にだったら、このことを話してもいいって気になつてきたな。そう、ミルクをかき混ぜながらだつて話ができるもの。私、名前はレイニーよ。

スノーデイが醜いわけじゃないのは見たでしょう。それから、物を見ようとすると、彼女のまぶたにかすかにしわがよるのもわかつたでしょ。スノーデイは白子^{しらこ}だけど、このあたりじゃ誰も彼女のことを醜いなんて言わない。赤ちゃんみたいなの、それは柔らかい肌をしてるんだもの。キングは、もし赤ん坊がたくさん生まれると、ちっちゃな白子がひと揃いできるかもしれないと考えて動揺したんだという人もなかにはいたけれどね。私はそんなことは言わないわ。キングはただ我儘^{わがまま}なのよ。先のことなんか考えない。

我儘でむちゃくちゃなのよ、ある人たちにたいしては。そう、あの人がスノーデイと結婚しちゃつたわけ。

そんじよそこらの、もつとできの悪い男だつたらそうはしなかつたでしょ、連中はわかつてないからね。ハドソン家にはマクレイン家よりは財産があつたけど、どっちも問題になつたり心配するに足るほどのものは持つてなかつた、あのころにはね。スノーデイのためについて、ハドソン

家のお金で、あの家が建てられたわけ。あの家のために、お祈りだつてもらつたのよ。ところがキングときたら、結婚するなんていうのは彼のちよつとした見せびらかしでしかなかったにちがいないの。自分がスノーデイといきなり結婚してしまうまでは、正式に妻をもらつたことのある男なんて他には誰もいなかった、そして彼女と結婚したからには、どんなふうに分が振る舞えるか他の人に見せてやらないといけないんだ、みたいなものよ。まるで、「ほら、みんな、俺さまを見ればモルガナからマクレインの郡役場まで、ずつとすべてがわかるつてもんさ」(そのうえ、おそらく)「はやり目の女の子と結婚したしな」てな調子ね。「なるほど」つて私たちも言つてあげましょう。あの人がそうしてもらいたがつてるみたいに——キングは悪党なのよ。スノーデイは彼女の身内と同じように親切で優しいわ。でも優しい人が相手だったら、いちばんうまくリードできるかという、もちろんそうじゃない。キングだつてあとでそれを思い知ることになつたし、みんなにもわかつたわ。そうよ、いづれ彼女はキングの裏をかいて彼を打ち負かすでしょう。そのあいだにもキングの子供たちは郡の孤児院で大きくなつてゆく、という人もいるけど。みんなが知っている子もそうでない子も、ほうほうでね。もどつてきたとき、彼はスノーデイには精いっぱい親切で礼儀正しくてね。最初からそういう人だつた。

世間じゃそうしておけばうまくいくものだといいこと、知らなかつた? 礼儀正しい男は要注意よ。あの人はスノーデイに向かつて声を張りあげるようなことはけつしてなかつたけど、ある日、彼女の家から出ていった。いえ、一度だけじゃないのよ!

あのときははずいぶん長いあいだ出ていったきりで、やっともどってきたの。スノーデイったら、彼には鉱水が入り用だったんだって話してたわ。そのつぎは一年以上、二年、いや三年もよ。二人子供をかかえてたこの私だって、キングが姿を消して、子供の一人が死んでしまったのを耐えたのよ。そう、そのとき帰ってきたときは彼は前もってスノーデイに言伝こたへしてきた。「森で会ってくれ」って。いや、彼は命令したというより誘ったの——「森で会うっていうのはどう？」キングが考えていたのは夜よ。スノーデイは「なんのために？」と尋ねもしないで彼に会ったけれど、キングじゃなくて私の亭主のフェイト・レイニーがそんなことをしたんだったら、私はわけを知りたがるでしょうね。だって二人はつまり結婚しているわけだから。家で腰をおろして明るく気持ちよく話そうが、ベッドですばらしいガチョウの羽ぶとんで気楽に寝ようが自由でしょ。私だったら、こちらが出かけてもキングは森には来ないんじゃないかとさえ考えるわ。まあ、スノーデイがなんの疑いももたずに森にでかけて行ったのは間違いないって、彼女を愛してる私にはわかるの。彼女の話では、二人は森で会ってどうするのがいちばんいいか決めたそうよ。

もちろんキングにとつていちばんいいっていう意味。言伝は壁にしてあってね。

「森」というのはモルガンの森のこと。誰でもすぐにキングの言ってる場所がどこかわかった。私だったら、一目散に他でもないそのカシの木に飛んでいけたわ。他に木はなくて枝が広がってて昼間でもほんとうに薄暗い、それだけしか私は知らないけれど。三年も彼に会っていなかったとしても、モルガンの森を歩いてると、キング・マクレインが月明かりのもとでその木によりか

かっている姿が目には浮かぶわ。「森で会うっていうのはどうだい」だって。聞いて呆れる。あそこに行くまで、気の毒なスノーデイがどうやって耐えたか、私には想像もできない。

それから双子よ。

私がかかわりはじめたのはそのときから。私がスノーデイを助けられるようになったのは、双子のことがあつてからなの。スノーデイのミルクでつくったわずかなバターを私が彼女のところへ持っていて、二人で仕事を始めてね。私はまだ結婚したてだったけれど、亭主のレイニーはさっそく体を少しこわしてしまつて、きつい仕事はやめるのがいちばんだったし。私たち二人ともしずいぶん若いときから一所懸命働いたわ。

私、双子つてすばらしいかもしれないいつも思つた。あの人たちにとつては言葉の響きだけでもすばらしかつたかもしれない。キングとスノーデイ夫婦は、マクレインの町から新婚さんでモルガナの町にやつてきて、あの新しい家にはいったの。キング・マクレインは法律の勉強もすつかり終つて弁護士をやることになつていて、ここではおおいに必要とされてたの。スノーデイはローリー・ハドソンの娘でみんなもよく知つていたわ。父さんがユージン・ハドソンよ。郡役場をこえた四つ辻をいったところでお店を開いていたけれど、楽しい人だった。その一人娘がスノーデイで、立派な教育を受け、みんなは多少なりとも彼女は教職につくものだと考えていたと思うわ。結婚はせずにね。でも、彼女は教えられるほどは目がよくなかつたの。ただ一つの障害だった。だけど、ここにいるコーマス・スタークや学校のお偉いさんは、スノーデイや彼女